
こちらとあちらとそれに関する諸々の話

白藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ひらとあひらとそれに関する諸々の話

【Zコード】

Z3079Y

【作者名】

白藍

【あらすじ】

部屋の鏡に知らない人が映っているのだが。誰なんだ、一体。幽霊だという解答は、恐すぎるので、全力で却下させていただく。ホラーが苦手な私が出会った恐怖体験アンビリーバボーの世界へようこそ。

嘘です。異世界とつながっちゃったけど、どうあるへんどうじょうか?みたいな話です。多分。

連載小説初投稿かつ見切り発車もいとこなので、まつたじゅつたり、お付き合いください。

繋がりました（前書き）

この度は、拙作に足をお運び頂き、ありがとうございます。警
告タグは保険として、つけてます。

繋がりました

ある夜、ふと自分の部屋の鏡を覗くと、何かがおかしかった。どうか、全てがおかしかった。前に立っている自分を映すはずの鏡に、見知らぬ男が映っていたのだ。

「……っ」

びっくりしそぎて声が出なかつた。思わず、後ろを振り向いたが、見慣れたベッドがあるだけで、誰もいない。当たり前だ。ここは、私の部屋で、誰かが入ってきた気配もなかつた。やめてほしい。私はホラーが大の苦手だ。二十歳も過ぎてから、靈感が目覚めることがあるのだろうか。今まで、幽霊を見たことも、感じたこともなかつたし、これからもないだろうと油断していた。いやだ、こわい。見間違いでいることを祈りながら、おやるおやる首を回し、視線を鏡の上に戻す。

果たして見知らぬ男は、まだそこにいた。ぎょっとして身を引き、鏡から距離をとる。目を見張り、こちらを凝視してくる男とじばしの間、見つめあつた。混乱のあまり、硬直していたとも言つ。

何か音が聞こえ、固まっていた自分に気づき、はつとする。音の出所は、目の前の男のようだ。なにか、強い口調で、話しかけられている気がするのだが、全く意味がわからない。恐怖のあまり、幻聴かとも思ったが、もう一度、男が語りかけてきたので、その可能性を却下し、不思議な聞いたこともない音に耳を傾ける。やっぱり、何を言つてているのかは、わからない。眉を寄せ、首をかしげながら、鏡を眺めていると、男は少しいらついた様子で、こちらから顔を背けて、舌打ちをした。

「感じの悪い男ね」

思わずほそりと、つぶやいてしまつ。幽靈にしては存在感のありすぎる鏡の中の男に少しだけ恐怖が麻痺したようだ。我ながら、恐がりなのか、図太いのか謎だ。男は、再度、目線を合わせてきて、顔をしかめたまま、口を開いた。何度、話しかけられても、わからないものはわからないので、弱りきつた体で首を振ると、男もあきらめたように、大きく息を吐いた。

少し落ち着いてくると、この奇妙な邂逅に対するさまたまな疑問は、横に置いておいて、目の前に居座る男を観察する余裕が出てきた。

一言で言つと、黒い。艶やかな黒髪は、後ろでまとめており、背中の中ほどまで流れている。切れ長な目も漆黒で、奥に闇を飼つているようだ。すっと通つた鼻梁に薄い唇。今まで見たこともないような美形だ。質の良さそうな、黒いガウンを羽織つており、高貴な雰囲気を醸し出している。これで金髪碧眼なら、きらびやかこの上なし、といふところだが、色彩の明度が低いのが、せめてもの救いだ。それでもあまり直視できない美貌と身のこなしである。

私が男を観察している間、向こうも鋭い眼光でもつて、こちらの様子をうかがつていたのだが、ほどなくして、男が鏡面を軽く叩き始めた。コツコツと振動がこちらにも伝わってくる。

それにしても、この鏡はどういう構造になっているのだろうか。叩けるということは、空間的にはつながっていないはずなのだが、音は響くのだ。音だけを通す不思議物質で出来ているのか。今まで何の変哲もない普通の鏡だつたはずだ。そつと鏡に手を置い

て、こちら側からも試しに叩いてみる。確かに手は通り抜けない。静かな空間に、私と男が鏡を叩く硬質な音だけが響く。

「なんか、おかしい。自分の部屋で知らない男と向かい合って鏡を叩いてるなんて」

苦笑がもれる。コツ、と鏡を断続的に叩いていた男の手が止まつた。不思議に思つて目線を上げると、眉間にしわを寄せた男の黒々とした瞳が、高い位置から、こちらを見下ろしていた。鏡を隔ててはいるが、至近距離で、男の威圧的な視線を受けると、身がすくむ。何かまことにでもしてしまつたのだろうか。

「お前、一体何をしたんだ。急に」こちらの言葉を話し出すから驚いたぞ。魔術師か何かか」

「えつ、そつち」や、なんで日本語」

目を見開いて、すかさず後ずさり、男を見つめる。わけがわからぬ。どうして突然、言葉が通じるよつになつたのか。男もあごに右手を添え、眉をひそめて、考え込むよつに、こちらを凝視している。とりあえず、落ち着かなければ。うん、そつだ、理由はなんであれ、言葉が通じるよつになつたということは、この鏡の中の住人と「ユニケーションがとれるとこつ」とだ。

「あんた、誰なの。人の鏡に、突然現れるなんて、人間じゃないとか言わないでよ」

むづ寝でもいいですか

ともかく、やつと田の前の怪しい超絶美形男と意思疎通ができると思い、発した言葉に、返事は返つてこなかつた。いや、正確には、返つてきたのだが、またあの聞いたことのない音になつていたのだ。

「ちょっと、どうこいつことなのよ。通じたり、通じなかつたり、わけがわからないわ」

鏡の中の男も、腕を組み、難しい顔でこちらを見つめている。唐突に、毛足の長い柔らかそうな絨毯にどっかり胡坐をかいた男は、長考姿勢に入ったようだ。いいかげん立ちっぱなしも疲れてきたので、私も鏡の前に膝を抱えて座つた。膝の上にあいを乗せて、ぼんやりと鏡を眺める。

顔を若干、うつぶせて考えに耽つてゐる男のまつ毛が田に入つた。女なら誰でもうらやむような長さだ。鼻も高く、典型的日本人顔の私がから言わせれば、その半分の高さでいいから分けてほしい、といつたところだ。黒髪黒眼と、色彩は似てゐるが、形状は似ても似つかない。ともかく、田常で、ここまで整つた容姿の人にお田にかかる機会などないに等しいので、田の保養をさせてもらおう。

体つきは一見、すらりとした長身だが、ガウンから覗く胸筋を見る限り、きちんと綺麗な筋肉がついているのだろう。あらゆる意味で実用的な身体をしている。眼光が鋭く、険しい表情ばかりなので、威圧感ばかりが強い印象を受けるが、田を合わせていない今は、あふれ出る色氣にあだられそうだ。このようなことをつらつらと考えている時点で既にアウトのような気がする。

あやしくなり始めた思考にストップをかけて、視線を移し、時計を見ると、日付が変わり、一時を過ぎていた。人間とは不思議なもので、もう夜中だと認識すると、途端に眠くなつてくれる。緊張と混乱状態が、緩んできたのも原因だ。

とりあえず、この不可解な現象については、明日に持ち越そうと決めた。眠くては、考えられることも考えられない。よし、今日はもう寝ようと、鏡をノックの要領で軽く叩く。

音が響いたのだろう。男は、思考の海から抜け出し、こちらに顔を向けた。目で先を促してくる。言葉が通じないので、後ろにあるベッドを指差し、寝たい旨を訴えてみる。男が怪訝な表情を浮かべたので、伝わらなかつたのかと思い、ベッドの布団をまくつて寝転がり、眠るふりをした。だめだ、このまま眠りの世界へ沈み込んでいきそう。

意識が、現実世界と別れを告げそつになつた瞬間、がつと大きな音がした。びくりと身体が跳ねる。重たい瞼をこじ開けて、音の発生源を探すと、男が右の拳を鏡面に叩きつけていた。

何やら怒つているようだ。黒い瞳は、鋭いを通り越して、人を射殺せそうな眼光を発している。眠気も吹つ飛びそくなくらいだが、それでも強烈な眠氣にあらがえない私は、激しい反発を覚えた。

人の鏡に勝手に現れておいて、貴重な睡眠も妨げるつもりなのか、この男は。いつもなら確實に即、平謝り決定の視線に違いない。だが、眠い私には関係ない。わき上がる怒りのままに、ベッドから飛び降り、猛然と鏡に向かつて突進した。両手を鏡面に叩きつけるように置く。半眼で男を見据えた。極度な眠氣は人格を変えるらしい。

「あんた、何様よ。人の睡眠の邪魔するんじゃないわよ。また、明日、相手してあげるから、今日はもう、おとなしく寝なさいよ。」

機嫌の悪さが、ふんだんに、こめられた罵声が部屋中に響いた。自分の声で少し我に返る。鏡に拳を当てたままこちらを威嚇してくれる男と対する。眉間にしわを刻んだ凶悪な顔面に心臓が縮こまつた。美麗な顔が、凶器のようだ。

「ごめんなさい。どうせ理解できないからと、暴言を吐いた私が悪かったです。悪かったから、もう寝かせてください。もういろいろと限界です。」

「お前こそ何様だ。この私にそんな暴言を吐いたのは、お前が初めてだ」

お読みですか（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。書いてる間、ずっと跟がつたのは、実は作者だつたりします。

言葉通じました

険悪な雰囲気の中、鼻先をかすめそうな距離で、男とこちらみ合つ。嫌味なほど長いまつ毛も今なら数えられそうだ。疲れと眠さで、にらみ合つのも面倒になつて、もつ勝手にベッドに入つたと、男から視線を外し、踵を返す。

「ちよつと待て」

命令口調に腹立ちの火種が疼いたが、あえて無視をする。待たない。今は、この男より睡眠あるのみだ。寝て起きたら、明日には、もとの普通の鏡に戻つていることを激しく希望する。

「手を
」

手を、何だと呟つのだ。声が途中から不思議な旋律に変わる。鏡から数歩のところで、男の方に振り返つた。ぼんやりと両方の手のひらを眺める。視線が鏡と手のひらを往復する。待てよ。

「もしかしながら、今、言葉通じてたんじゃ……」

つぶやいた途端、意識が覚醒へと向かう。眠たいときの反応の鈍さには、我ながら呆れる。今、確実に鏡の中の男と会話が成立していた。今度はしっかりと鏡を見つめる。

男は、頬杖をつき、冷たい視線をよこした。全身で呆れを表現しながら、手のひらをこちらに向けて伸ばし、鏡面に、ひた、と触れ、私に深くうなづきかける。

私も鏡に触れる、ということか。両者が、鏡面に触れていないければ、言葉は通じないのだろう。先ほど、男の言葉が、途中からわからなくなつたのは、私が鏡についていた手を離したからか。

ひとつと、少しの緊張をはらみながら、鏡に手を伸ばす。指の先が面上に触れ、冷たい硬質さを感じる。

「お前、脳みそ生きてるか？ いくらなんでも鈍過ぎるだろ」

私が鏡に触れた途端に、男の痛烈な皮肉が飛んできた。よほどいらいらしていたのだ。

「言いたいことは、それだけ？ もつこいかげん寝たいのよ、こっちには」

「んなまつくりすけに負けてられるか、と不機嫌さのあふれる口調で切り返す。

「お前は、口を開けば、眠いだの、寝かせろだと、この異常な状態で寝られる神経がわからん」

低く響く聲音で、嫌味を言つ。いい声なのだから、もっと違う用途で使うことを選めたい。やうに言つなら、眉間にしわを寄せた険しい表情のせいで、人付き合いにおける美形という人種が受ける恩恵をざぶに捨てているといふことも忠告したい。

「……お前、そんなに私を怒らせたいのか。鏡があつて命拾いしたな。なければ首が飛んでいたところだ」

地を這つのような声が伝わってきた。どんどん空気が重くなつてい

る気がする。何故だ。私は、眠りたいだけなのに。

怪訝な顔をして男を見た。鏡の中の住人は、はあ、と大袈裟に息をついて、目をすがめ、幾分か表情を緩めた。

「思ったことが、口から全部出でているぞ。まあ、そんなことは、どうでもいい。とりあえず、お前は誰だ」

なんと、私の口め。険悪な雰囲気に油を注いでいたのは自分だったのか。

「誰と聞かれても、しがない一般庶民ですけど。あんたこそ、お金持ちの坊ちゃんみたいな生活してそうだけど、何様よ」

男は、片眉を上げ、腹立たしげにこちらを見る。

「先程から、おかしいとは思っていたが、私の顔を知らない時点で、ディアスの民ではないようだな」

ディアスとは何だ。聞いたこともないが、マイナーな外国名なのがもしそれない。それにしても、この男、自國では顔バスのようだ。施政者のたぐいが。

「れっきとした日本人よ。ディアスってどこの国なの。アジア？ヨーロッパ？」

鏡をはさんで、お互い、いらだちを含んだ困惑した表情を曝している。

「日本もアジアもヨーロッパも聞いたことがない。私の世界は、デ

「アイスだと言つていい。その他の名称で呼ばれる」ことなどない」

意味がわからない。日本は、ともかく、アジア、ヨーロッパを知らないのは、おかしい。それに、この男、今、世界と言つたか。統一された単一の国家なのだろうか。ますます現実味のない話だ。意志疎通できるようになつたのはいいのだが、謎は深まるばかりである。

とりあえず、私にとつては、男が幽霊だという選択肢は却下できませんので、それだけが救いだ。こんなにはつきりと対話できる奴が幽霊であつてたまるか。鏡越しの確認だが、足もあるようだし、男がどこの世界、そう言つていたから世界と言つておく、出身であろうが、人間であれば良しとしておこづ。

「あー、ほんと、頭が混乱して來た。ここいらぐんで、今日はもうお開きにしない？明日、学校も行かなきやだし、切実に眠りたい。あんたも、明日、仕事とかあるでしょ。帰つてきてから、また話し合おうよ。どっちかが、鏡叩けば、それに応じるつてことで」

鏡に手をついたまま、首をめぐらし、大きな布がないか探す。流石に、音は防げないが、視界は塞ぎたい。これでも一応、二十一歳の女なのだ。私の寝姿や着替えなど、見ても何の得にもならないが、こちらの精神衛生上、非常にようしくない。

「結局、寝るという結論か。まあ、そつだな、明日も早い。たいした時差もなさそうだし、お前の提案に従おう。私も、もう寝よう。ではな」

さつと、手を離し、堂々とした歩みで去つていく男が鏡に映る。田の前から男の姿が完全に消えると、私もそつと手を離した。部屋

の棚に置いてある籠から、大きめのバスタオルを引っ張ってきて、鏡面を隠すように掛ける。

「……とつあえず、寝よう」

言葉通じました（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます^_^ 一人の自己紹介までなかなか辿り着かないです。なんでだ。

現実逃避は好きですか

起きたら、全部、夢でした。

なんてことにはならず、そろつと、可愛いのか可愛いのか微妙なキャラクターの描かれたバスタオルをめくつてみたら、豪奢な飾り棚のようなものが映っていた。他にも、毛足の長い、ブラウンの絨毯に、丸くて光沢のある小さなテーブルなど、私の部屋には到底あるはずもない家具たちが、鏡の中に鎮座していた。バスタオルを元に戻す。

「ああー、夢じゃなかつた。夢じゃ……なかつた」

額を右手で押さえる。朝から、頭が痛い。いや、いつたん忘れよう。帰つてきてから考えよう。頭の片隅では、完璧なる現実逃避だとはわかつていたのだが、心の平安のため、鏡と男のことは、記憶から抹消した。

コツコツ。

夜、十一時過ぎくらいに、バスタオルの向こう側から、硬質な音が響いた。私は、もつと早くに帰つてきていたし、向こう側の住人が帰つてきたのもわかつていたのだが、こちらから、鏡を叩く気になれずにいたのだ。今も、無視したい気分でいっぱいだ。バスタオルのキャラクターと視線を合わせながらじばらく様子を見る。

コツコツ。

聞き間違いではなかつたようだ。往生際が悪いことは、わかっている。実は、男がない間に、バスタオルをめくつて、ちらちらとあちら側を確認していたことも認めよう。だが、音が鏡の向こうから響いてくるという非現実な現実を受け止めたくない自分もいるのだ。

私が、現実逃避という名の無視を決め込んでいると、呪いでもかけられているのではないかと疑うくらいのおどろおどろしい低音が、響いてきた。それが、バスタオルのキャラクターとミスマッチ過ぎて、恐いやら、笑えるやらで、反応に困る。

鏡の向こうで男が脅しをかけてきたことは、十分にわかつたので、仕方なくバスタオルをめくり、鏡と向き合つた。眉間にしわを寄せた鋭い眼光の男が、昨日同様、目の前に映つている。黒いガウンを纏つた男は、今日も黒い。ちなみに私は上下スウェットで、寝る準備は万端だ。

男はもう手のひらを、鏡に置いていて、見下ろす視線で催促されたので、私も仕方なく、鏡に触れる。

「う、ご機嫌麗しゅう……？」

無視した後ろめたさも相まって、苦々しい笑みを作つて男を見上げ、視線を合わす。

「これが麗しく見えるのか。お前が、なかなか鏡を叩かないから、こちらから叩いてやつたというのに。昨日は、お互に混乱していて、自己紹介もままならなかつたから、今日はそこからだな。私は、ラインヴァルト・カイザー・フォン・ディアスという。お前の名はなんだ」

なんというか、私は貴族です、と言わんばかりの長々しい名前だ。ライ、ライン……なんとかかんとか、ディアスと言っていた。昨日聞いたディアスは、確か男の世界の名ではなかつたか。ありふれた姓としてディアスが使われているのかもしれない。男の風貌や、立ち居振る舞いからも、その線は限りなく低いことがわかるが、あまりつっこんで考えたくない。

「私は、友希。水無瀬友希。みなせゆうきあ、名前が友希で、名字が水無瀬ね。で、ディアス在住のディアスさん、あんたはなんで私の鏡の中の住人なの？」

ほんと、最初見た時は、とつとつ幽霊なる者に遭遇してしまつた、と恐怖の極致だつた。これがおじいちゃん、おばあちゃんだったら、ショックで心臓が止まつてるとと思つ。

「それは、じちぢのセリフだ。執務から帰つてきら寝室の鏡に見知らぬ部屋が映つていたのだからな。それにお前が急に現れたから、更に驚いたぞ。魔術師が賊に入ったのかと思った」

魔術師とは、またファンタジーな単語が飛び出してきたものだ。そんな怪しげなものになつたことは、生まれてこのかた一度もない。賊もしかり、だ。だが、それよりも。

「ディアスさん？自己紹介したんだから、いいかげん、お前つて言うのやめてくれない？」

眉をひそめながら、少し挑発の雰囲気を籠める。男は、正面から身体をずらし、右手を支柱にこちらに向かつて体重を傾けていた。左手で額にかかる前髪をかきあげ、その間から、黒曜石のような瞳

を細めて見下ろしていく。

上からの流し目に、心臓が大きな一拍を打つた。そうだ、この男、人とは思えない程の整った容姿をしていたのだった。威圧感に慣れてくれるが、ますます美貌が際立つ、ということに今、気づかされた。できるだけ、さりげなく、視線をそらす。

整いすぎた美貌というのも考え方である。確實に、心臓細胞のいくつかが、破壊された気がする。鏡越しの距離も、実際に触れることはできないのだが、近すぎるのがいけない。殺氣まがいの威圧感や、色気垂れ流しのフローロモンに、凡人の心臓はどこまで持つのだろうか。がんばれ、私の心臓。

「真っ先に言つことはそれなのか。もつと他にあるだろ、まつたく。それで、お前はなんと呼んでほしいのだ？私に数々の暴言を吐いてくれた勇気に免じて、特別に希望を聞いてやるつ」

声に反応し、視線を戻してしまつた。右ひじを折り、腰をかがめた男の顔が目の前にせまる。黒い瞳の奥にある闇色に囚われそうだ。鏡越しだが、壁際に追いつめられた錯覚をおこす。傍からみれば、良からぬ輩に絡まれているように見えるだろう。ただ、ものすごく妖しい雰囲気を纏つた輩ではあるが。

自らを知り、人を圧倒し、支配し慣れた者が持つ濃厚な気配に身の毛がよだつた。目をそらすこともできないままに、知らず、左足が一步、後ろに動く。男はそれを認めるが、薄い唇の端をゆっくりと見せつけるようにひき上げた。

「ん？ もつとまでの威勢はどうした。コウキ？」

さらにグッと顔を寄せて囁いてくる。低い心地の良い声が鼓膜を響かせた。男の黒い目がきらめいて、おもしろがっている。悔しい、悔しいが、今まで経験したことのないような高压的で妖艶な空氣に当たられて、顔から血の気が引いているのが、自分でもわかる。早く復活しろ。気合いをいれて、バツと、視線を無理やり引き剥がし、向こう側の絨毯を斜めに見やる。非常に不本意だが、自分の身は大事にしなければならない。

「……やつぱり、お前、でいいです。名前呼ばれる度に寿命が縮むわ

現実逃避は好きですか（後書き）

読んで頂いてありがとうございました。やっと名前が出てきました。
ふいー。

結局、あの後、男は散々面白がった上に、私の希望は聞き入れず、ユウキ、と呼ぶことに決めたようだ。ちなみに、男のことは、ライ、と呼ばれることになった。ラインヴァルトの愛称としてライと呼べ、ということらしい。 そうなるまでの経緯は推して知るべし、だ。思い出したくもない。

当初は、自分と他人のプライベート空間が繋がって、ストレスを感じるかと思ったのだが、案外大丈夫だった。ライは、いつも執務が忙しいらしく、夜中、早くても日付が変わる前くらいにしか寝室には帰つて来ないからだ。最近では、寝る前のちょっとした話相手と化している。バスタオルで隠ししているので、大きな音を立てなければ、比較的自由にしていられるし、図太く産んでくれた親に感謝である。

「あー、今日は何しようかなあ

一人暮らしは独り言が増える。今日は休みなので、お昼前まで爆睡していた。お腹がすいたので、簡易キッチンの横に設置された冷蔵庫を開ける。確かに、冷やご飯があつたはずだ。半分残った玉ねぎとパックのしめじも一緒にとり出す。玉ねぎをみじん切りにして、軽くオリーブオイルをひいたフライパンで炒め、しめじを投入する。適当なところで、牛乳とコンソメ、冷やご飯も加える。水分がなくなつてきたら、仕上げに、バターとチーズをからめて、簡単適当リゾットもどきの完成だ。

チーズのいい香りが漂う中、テレビの前に置かれた小さなテープ

ルの上に、食事の準備をしていく。愛用の白いカップにお茶を注ぎ、スプーンを持つて、いそいそとクックションに腰を下ろす。よし。

「ユウキ」

さあ、食べようとしたスプーンでリゾットもどきをすくった瞬間に、ここ何日かで、だいぶ聞き慣れた低音が部屋に響く。なぜか、名前だけは離れていても伝わることがわかつてから、だいたい用があるときは、どちらからともなく、名前を呼びかけるようになっていた。それにしても、私が食事をするタイミングを見計らっていたのではなかろうか。待たせると機嫌が悪くなるのは、田に見えていたので、お盆にリゾットとお茶を乗せ、鏡に向かう。

バスタオルを外すと、もう鏡に手を触れたライが、田の前に立っていた。今日も相変わらず見田麗しい。ガウン同様、普段着の彩度も低いが、それがまたよく似合つから腹立たしい。それはともかく、こんな昼間から、声をかけてくるとはめずらしい。何かあったのだろうか、と首をかしげながら、鏡に触れる。

「どうしたの？」

「いや、何、ということもないのだが、少し時間がとれたので帰ってきたのだ。今日はユウキが休みだと言っていたのだな。暇をしているのではないかと思つて、気を遣つてやつたのだ。いつも夜ばかりだし、昼間に会つのも新鮮でいいだろ？」

なかなか、かちん、とくることを言つてくれるのだが、これに乗つてしまつと、話がいつも逸れる上に進まないので、ここは私が大人になろうとがんばつてみる。しかし、この男、私が一々咬みつくのがおもしろくて、わざと煽つてくるふしがあるので、手に負えな

い。

「新鮮つて、ほとんど毎日顔あわせてる相手に使わないわよ。夜に会つても、昼に会つても、あなたの印象まっくろくろすけだしね」

前にまっくろくろすけとはなんだ、と聞かれたので、絵に描いて見せると、その可愛らしさに複雑な顔をしていたのを思い出す。頬を緩めて、にやつきたうになつていると、目の前の雰囲気が変わつた。

「コウキ」

低くて心地の良い声が耳をくすぐる。闇色の目を細めながら、形の良い唇の端を上げたライが、目に入った。途端、背筋に悪寒が走る。目が笑つていない。恐いからやめてほしい。この顔かたちの整つた男が、これをやると、冗談にならないくらいの威力を發揮するのだ。凡人はおとなしく屈するに限る。

「「めんなさい!」はい、謝つたから、その物騒な雰囲気早くしまつて、ライ!」

ライには、まずいと思つたら素早く謝る、というのが鉄則だ。私の寿命を守るためにには絶対厳守だ。動物が一生涯で打つ心拍数は、だいたい決まっていて、ゾウもネズミも同じくらいだと聞いたことがある。ネズミの方がだいぶ脈拍が早いらしい。その理論でいくと、私も、心拍数が上がると寿命が縮まるということになる。危ない、危ない。

「お前は、本当に謝る気がないのが、まるわかりだな、まったく」

当たり前だ。自分は平氣で、お前、お前、と連呼するのに、私が、あんた、と言つと、必ず名前で呼ぶように強要する男に、謝る気持ちなんてこれっぽちもわからない。いや、少しさわぐが、反抗心の方が強くてしまつのだ。我ながらかわいくない。

「だつて、お皿(はん)はん冷めるし。お腹すいてるし」

お盆を床に置いて座り、足の先を鏡につける。行儀の悪いことは承知の上だが、身体の一部分が触れていれば、言葉が通じるので体勢としては楽だ。ライは若干呆れたような目で見下ろしてから、自分も片膝を立てて座つた。

「昼食の途中だつたのか。何やら持つているな、とは思つていたが。自分でつくつたのか?」

リゾットを食べながら、ライの鏡面についた右手をぼんやりと見やる。料理は好きなので、少しなら自信がある。実家で暮らしていた時も、概ね好評だつた。

「わつよ。これでも結構料理つまいんだから」

得意げに返すと、眉を上げて、驚いた風な顔をする。いつも上下スウェットの女が料理をするのがそんなに意外か。

「それは見かけによらず。誰にでも一つくらい、長所があるんだな」

大いにからかいを含んだ声だ。おもしろがつてているのがわかる。というか、いつも夜中に会うからスウェットなだけで、外に出るとときは、きちんと化粧もしているし、それなりに身だしなみには、気を遣つている。

「うわー。ひどこ贏こ算つー。もしも、やつが行くことがあつたら、手料理食べさせてやるの。絶対おこしこつて言わせてみせるからー！」

瞬間、ライの雰囲気がなぜか、急に和らいだ気がした。彼の唇が薄く笑みを佩く。

「やうだな、楽しみにしてる」

西の西の日常しきめん（後書き）

「いいやで読んで頂いてありがとうございますへヘリゾットが食べた
いよー。

癒しグッズは大切にしましょう

正直、目が釘付けになつたまま、呆けてしまつた。ライの皮肉を含まない笑みなんて初めて見たからだ。威圧感が緩んだ純粋な笑みは、綺麗過ぎて言葉が出なかつた。ああ、心臓に悪い。そんな人並み外れた美貌の持ち主は、今日も執務から帰ってきて、グラスを片手に目の前に座つてゐる。多分中身はブランデーだ。

「ねえ、ちょっと氣になつてたんだけど、そつちつて土足よね。いつも、じかに座つてゐるけど、汚れないの？」

ブラウンの柔らかそうな毛の絨毯が、とても気持ち良さそうで、いつも触れてみたくなる。できないのはわかっているので、自分の部屋のラグの毛をさわさわと撫でる。このやわい感触に癒される。

「ああ、毎日、侍女らが掃除してくれてゐるから大丈夫だ。履物も部屋に入る時に、除去マットで綺麗にするしな」

足元の毛足の長い絨毯を左手で撫でながら、鏡に肘をつき、興味なさそうにグラスを傾けてゐる。あの、ふかふかの毛並みの中に座つてみたい。きっとすくなく気持ちがいいはずだ。それにしても、料理は得意だが、掃除は苦手なので、うらやましい限りだ。適当に掃除機をかけるだけで終わる私の部屋とは違つて、毎日隅々まで綺麗にされているのだろう。

「毎日掃除してくれる人がいるなんて、いいご身分ね、ほんと」

右手から伝わる鏡面の冷たさと、左手で触れている毛の優しい柔

らかさを感じながら、ライの黒曜石のような瞳を見上げる。こちらを馬鹿にするような、少し呆れたような表情の後、すっと視線を遠くに移し、薄い唇を苦笑の形にゆがめた。

「つらやましいなら、いつでもかわってやるが。ただし、執務に忙殺される覚悟があるのなら、だが」

いわゆるノブレス・オブリージュというやつか。そうされるだけの身分には、それだけの覚悟と義務が付随してくるというわけだ。そういえば、ライは、貴族だと思うのだが、どのあたりに位置しているのだろうか。政務や執務という単語が出てくるから、宰相職かなにかだらうか。

「謹んで遠慮をせさせていただきます」

面倒なことが嫌いな私は、すぐさま満面の笑みで辞退した。ちらりと田線をこじからにこしたライは、片頬をあげている。黒々とした瞳には、おもしろがる光が浮かんでいて、先ほどよりも柔らかい表情だ。容貌が整っているだけに、笑みに無邪気さが混ざると、可愛く見えてしまつて困る。

高圧的ながらかいを含んだ笑みに慣らされている私には、時々不意に見せるライの純粹な笑みに対処する術がない。違う意味で圧倒されるのだ。ああ、どんどん寿命が縮んでいつている気がする。どちらにしても、激しく心臓に負担をかけてくる男である。視線を外し、床のラグを見つめ、指先で毛をつまんでみる。くすぐったい。

「なんだ、残念だな。お前に押しつけたら、この辺はから逃れて、自由に過ごせると思つたんだが」

くつくつと、のびの奥を震わせながら、両手を組めている。私の心中など、我知らず、楽しそうでなによりだ。美麗な男を眺めて、目の保養などと言つたが、あれはたまに鑑賞するからよいのであって、毎日だと刺激的過ぎることに気がついた。今更ながら、穏やかに過ごすためには、関わることなかれ、ということだったのだ。本当に私にとつては、時すでに遅し、なのだが。

そつは言つても、時折訪れる不整脈にさえ堪えれば、実は、ライと話しているのは思いの外楽しい。こちらとは違う生活様式や、自然体系など、異世界間交流とでも言つのだろうか。単一国家などこちらの世界にはないから、きっと異世界同士なのだろうとこう仮定に落ち着いたのだが、同じようなところも多々あるからこそ、それ以上にある様々な違いに触れたときが、おもしろいのだ。単純に興味深い。

「……わつきから、ひたすら絨毯の毛をむしっていいよ」だが、その絨毯、大丈夫か？」

いぶかしげな声が聞こえて、はつ、と流れに流されていた思考が現実に戻る。曲げた両膝の上にあごを置いて、一心にラグの毛を引つ張つていたようだ。私の大切な癒しグッズが無残な姿になつている。労わりの気持ちを込めてラグを撫で、毛並みをなおす。その行動を珍妙な動物を観察する目で静かに見届けたライは、すつ、と立ち上がつた。

「どうせ、もう眠いのだろう?お前がおかしなことをし始めたら、大概そうだしな。今日はもう寝るか。では、またな。おやすみ、コウキ」

会話を切り上げて、寝台に向かうライの後ろ姿を見送る。角度を

変えると結構広い範囲で向こう側を見ることができる。電車の扉の窓から見る外の景色のようだ。なんとなく、姿の見えるぎりぎりまで見届け、バスタオルをそっと掛ける。踵を返して、部屋の明かりを暗くし、ベッドに潜りこんだ。横になつてまるまつ、目を閉じる。

彼は、いつも私のことを、お前と並んで、最後には必ず、名前を呼ぶのだ。

「おやすみ、ライ」

癒しグッズは大切にしましょう（後書き）

読んで頂いて、ありがとうございますへへふわふわいいですよねー、
ふわふわ。

全ての元凶はホラー映画です

今日は精神的に疲れた。大学の友達が、映画に行くといつので、ひさびさに映画もいいか、とついて行つたのが、大きな間違いだつた。洋画のアクションものが観たかつた私に対して、友達らは、邦画のホラーが観たかつたようで多数決で負けたのだ。ここまで来たのだから、と半ば無理矢理引きずられ、一緒に鑑賞してしまった。怖いもの見たさの精神で、結局最後まで観てしまい、今現在、後悔に打ちひしがれている。

「……ライ、早く帰つて来ないかな」

部屋に帰つてきた時は、大丈夫だつたのだが、夜になるにつれて心細くなつてきた。邦画のホラーは特に觀てはいけない。あの、端の方に映つている恐怖に、じわじわと漫食されていく感じがもう、恐すぎる。そんな焦らしあはいらぬから、ひと思いにやつてくれ、と何度も思つた。

外が暗くなつて、いつたん、恐怖に絡めとられると、そこから抜け出せなくなつた。影になるところになにか潜んでいる気がして、明かりを全てつける。意味もなく、テレビもつけて、音量を心持ち大きめに設定する。

鏡のバスタオルを外し、ベッドから掛け布団を引つぱつてきて、くるまり、その前に陣取つた。膝をかかえて、布団から出でている足先で鏡面に触れる。ひんやりとした冷たさが伝わつてくれた。ぎゅつと目をつぶつて、もう絶対、誰がなんと言おつとホラーは観ない、だから、早く帰つてきてください、と鏡の向こうにわけのわからな

い祈りを捧げる。

どれほど時間が経つたのか、向こう側で、扉が開く気配がした。はっと、顔をあげると、大股でこちらに向かってくるライが目に入る。

「何をしているんだ、お前は」

鏡に片手をつき、眉をよせて、上から覗き込んでくる。現金なもので、ライの顔を見たら、急に恐怖がしほんだ。一人でいるのと、誰かがいるのとでは、精神的にだいぶ違う。

「な、なんでもないわよ。それより、今日もお疲れ様。いつもより、ちょっと遅かつたんじゃないの?」

ばつの悪さを隠すように、胸のあたりで布団をかきいだき、立つたままのライを見上げる。

「いや、むしろ早かつたくらいだが。どうした、なんか変だぞ、お前」

恐さのあまり、時間感覚が狂っていたのだろう。それに待つている間は、長く感じるものだ。ライはいぶかしげな表情でこちらを覗きこむように、その場に座つた。いつものごとく黒いガウンがよく似合っている。そう、ガウンが……。

「うあー!今、重大なことに気がついた!最大の難関、お風呂が、まだだつた!」

布団を離し、頭をかかえる。ホラーの後の、お風呂はだめだ。頭

を洗つて、田を開ける時の恐怖と叫つたり、想像だけで身がすくむ。

「風呂がどうしたというのだ。本当に、今日ははじうした。いつもおかしいが、今日はそれに輪をかけておかしいぞ。きちんと、私にもわかるように説明しろ」

急に叫び出した私に、少し田を見開いて眉をあげてこる。怪訝を通り越して、完璧に不審者を見る田をしていた。実際、不審者そのものだから仕方がない。いや、仕方なくない。この男、結構ひどいことを言つてこる。

「いつもおかしいってどういうことよーつじやなかつた。あの、私、いまからお風呂入つてくれるから、ライ、ここに居てくれる?..」

「はつーーお前、自分が何を言つてゐるのか、わかつてゐるのか?」

黒々とした瞳をめいにぱいに開き、眉間にしわをよせて、鏡につけた手にも力が入つてゐる。

「とりあえず、お風呂入つてくれるから。私が出てくるまで絶対ここにいてよ? わかつた?..」

私の、尋常ではない剣幕に押されたのか、ライは、怪訝な表情のまま、承諾してくれた。ライの中での私の位置づけが、確實におかしな方向へ傾いていくのはわかつたが、背に腹はかえられない。

鏡からの視線を一切無視して、着替え一式を持つてお風呂場へ直行する。昼間の映画を思い出さないよにしながら、シャワーを浴びる。あまり待たせるのは悪いというのと、恐いから早く出たいと、いう気持ちが相まって、カラスの行水だ。上下スウェット着用で、

鏡の前に戻る。

「で、どうこいつなんだ、一体」

いつの間にか、グラスを手にしたライが、半眼で視線を合わせてくる。お風呂に入る、といつミッシュョンを終え、落ち着いてきたら、猛烈に恥ずかしさがこみ上げてきた。

いくら、異世界人といえども、男の人を風呂待ちさせるなんて、數十年前の私は何を考えていたのか。いたたまれなくなつて、視線を床に向け、鏡に置いた足先を、曲げたり伸ばしたりしてみるが、状況は変わらない。だんまりを決めこむ。

「こちらを向け、ユウキ。それが、人を待たせた者の態度か？」

正面から、威圧的な空気が漂つてくる。ライが名前を呼んだら、危険信号なのだ。そろそろと、窺うように、黒曜石のような瞳を覗きこむと、彼は切れ長の目を細めた。強い視線に圧倒され、闇色に囚われる。何か閃いたのか、口元を楽しげに歪めて、さらに顔を寄せてくる相手に、為すすべもない。

「なぜ、何も言わない。風呂に入るからこひで待て、とは。もしや、私を誘っていたのか？……残念だな。隔てるものがなければ、存分に可愛がつてやれたものを」

色気をふんだんに含んだ低音が、耳朶をくすぐった。薄い唇に笑みをのせ、妖艶な雰囲気を纏い、濃い空気を生み出す。ぎゅっと心臓が収縮する。じつと、目の奥まで見通すような視線に、背筋がぞくつとした。反射的に、両手を後ろについて、ライと距離をとる。

「ち、違うわよっ！ そんなことあるわけないでしょー…ひやんと説明するから、それはた迷惑な空気出すのやめなさいよー。」

顔を真っ赤にし、鏡に勢いよく手をついて言い放つ。ライは、からかいを含んだ視線をよこし、口元に手を当てて、くくっと、のどを震わせている。完全に遊ばれている。免疫のない私をつかまえて、おもしろがっている。本当に腹立たしいことこの上ない。

おもしろがりながらも、説明を求めてくるライに、しぶしぶ、ホラー映画のくだりを話す。向こうには、映画がないようなので、劇のようなものだと説明した。途中、呆れ顔になつたり、笑いをこらえたりしている美貌の青年に、怒りの視線を浴びせながら、お風呂のところまで話し終えた。

「お前がそんなに恐がりだつたとは思わなかつたな。私を見たときは、そんなに恐がつてなかつただらう。といつよつ、咬みついてきていたよな」

新しいおもちゃを見つけた子供のように黒い瞳をきらめかせている。いやな予感しかいない。一番弱みを見せてはいけない人に、弱みを握られた気がする。

「ライの存在感がありすぎて、幽霊じゃないつて思ったから大丈夫だつたの！」

「そうだ、でないとあんなに喧嘩！」しの発言ができるわけがない。仮に、幽霊だつたとしても、絶対認めないが。

「それはそつと、幽霊とはなんだ」

意外な質問にライの方を見やると、鏡の向こうで、あいに手をあてて、首をかしげ、不思議そうな表情をしている。

「えつ、そつちつて幽霊いなの？日本では、魂という概念があるね。死んで肉体がなくなつても、魂はなくならないって言われる。未練の残つている人とかが魂だけの姿で現れるのが、幽霊！」

何やら思案顔をして、真摯な視線をこちらに返してきた。何か、思つところでもあつたのだろうか。

「こちらでは、死ぬといふことは、跡形もなく、消滅することだ。そつこつ考え方もあるのだな」

幽霊の説明をしたつもりながら、ライは、違うところに引っかかつたようだ。こちらの概念を柔軟に受け止めようとするところには好感が持てる。

しかし、今日のことを話したおかげで、ぱつちり、ホラー映画の内容を思い出してしまった。幽霊の話題も大変よろしくない。恐怖がじわりと、よみがえつてくる。だめだ、今夜は、一人で寝れる気がしない。だが、ライを付き合わせるわけにもいかない。

「あのや、正直、今日恐いから、目隠しなしで寝てもいい？・プライベートな空間だから、視界くらいは塞がないと、とは思うんだけど、今日だけお願いつ！！」

両手を合わせて、しっかりと、目を見て拝んでみる。これだけは、切実に承諾してほしい。じつと、念を込めながら、漆黒の瞳を見つめ続ける。

「お前は、幼子か。もう、寝るまで、ソリヤしてやるから、わざわざ寝る」

大きくため息をついて、前髪をかき上げ、私のうしろにあるベッドを指差す。予想外の返答に、目をむいた。

「そ、そこまで求めてないんだけれど…むしろ変な緊張で眠れないつー」

どうしてこんな展開になつた。私は、バスタオル撤去をお願いしただけだ。安眠妨害反対。

「つべこべ言つた、ユウキの分際で。は、や、く、寝、う」

結局、凡人は、類稀なる男の圧力に屈しなければならないのか。長いものには巻かれり、といつことか。掛け布団をひきずつて、ベッドに入る。

横になつてまるまると、一いちらを眺めるライと目が合つた。鏡にもたれかかるよつとして、目を細め、笑みを浮かべてゐる。胸の前でぎゅっと拳を握つた。心音が早まつて、ライの視線から逃れるよう、目を閉じた。

全ての兎団はホラー映画ですか（後書き）

いいまで読んで頂いて、ありがとうございます。ホラー観た後
つての風呂の鏡恐いですよね？

気づかないふつをしてもいいですか

ホラー映画の一件があつてから、着替えなどの時以外は、鏡にバスタオルを掛けなくなっていた。もともと、ライ側からは、目隠しがされていなかつたので、私の裁量で決まるのだ。寝顔もばつちり見られただろうし、いろいろとあきらめがついた。ラグですべつて転んで、そのままじろじろ戯れて、その拳句に、うとうとし始めるといった一連の流れも、呆れた冷たい視線と共に、きつちり見届けられたりしている。

「あ、ライ。おかえりー」

帰つてきた気配に、鏡の方を向いて声をかける。お互い、「おかえり」と「ただいま」は、相手の言葉でわかるよつになつた。

「ああ、ただいま、ユウキ」

不思議な旋律に疲れが滲んでいる。足取りも重そうだ。寝こじろんでいたベッドからおり、鏡へ向かうと、ライも同じよつに寄つてくる。顔色をうかがいながら、鏡に触れる。

「すこしくお疲れのようだけど、なんかあつたの？」

「いや、たいしたことはない。光の加減か何かじゃないか？」

ライは、とにかく弱みを見せたがらない。それは、徹底していく、何食わぬ顔をして、追求をかわしてしまつ。何かあつたかまではわかるが、それが何であるかは、絶対に悟らせない。それだけ気の許

せない環境で生活してこるのでだろうが、私にくらい、話して息抜きをしてもよいと思う。向こう側と接触できない私なら、話してもなんら影響はないのだから。

「あいだ、話すだけでも楽になると思ひ、と言つたら、お前には関係ない、と返された。全くその通りなので、それ以来その話題は出していない。拒絶の空気を強く感じるときは、触らぬ神に祟りなし、だ。本当は、気になつて仕方ないが、押しつけるのもよくないし、もし、ライが話そつと思つたら、真剣に聞ければいい。

「うーん、そつか。ライの部屋につつも薄暗いからなあ

あつとそのせいだな、と少し笑いながら、うなずいて見せる。

「薄暗いとは失礼だな。夜の寝室なのだから当たり前だ」

疲れた表情を消して、いつもの皮肉げなライに戻る。もしかしたら、この鏡が繋がる前は、この部屋だけが、気を緩めて一息つける場所だったのかもしれない。出合つてから、それほど経つてはいいが、毎日のように話してきて、彼が他の誰かに気安く弱音をはけるタイプとは思えない。彼の癒しの場を私が奪つているのではないだろうか。そこに思い当たると、すつ、と心が冷えた。

「ねえ、やつぱり、いつもは、田舎じつけようか

なんでもなじように口元に笑みを浮かべながら、さりげなく、目を伏せ、視線を足元に向ける。

「どうした、急に。お前、恐がりだろ。どうせすぐこ外すことになるんだ。無駄なことはやめておけ

「つむいた頭じしに、落ち着いた低音が伝わってくる。ライの顔は見れなかつた。もし、提案を受け入れられていたら、ひどく落胆していただろう自分を強く自覚させられたから。詰めた息をふうつ、と吐きだす。

「……うう、反論できない」

心の内側にふたをするように、大げさにうなだれると、ライが笑う気配がした。

なぜこの鏡は声だけを届けるのだろう、と思つ。触れられるのは、結局、自室の鏡だ。私とライとの間には、とてつもなく、途方もないくらいの壁が立ちはだかつてい。

ときどき、ライと話していると、触れている鏡の硬い質感と、ひんやりとした冷たさが際立つて、身体にしみわたる心地がする。このある意味、不毛とも思える交流の温度のような気がして、心の奥が疼く。

つきつめでいくと、ライという存在をしつかり実感したいと思つている自分がいて、私が思うよりも、ライは私の中に深く、くいこんできている。自覚しつつも、それを片隅に追いやつて、逃れようとするのは悪あがきなのだろうか。

ライの節高く長い指を鏡越しに眺める。

触れられない。それがひどく重い枷となつていて。無駄なのだと、この言葉だけの繋がりは、繋がりのように見せかけて、いつか簡単に切れてしまう糸なのだと、眼前につきつけられている気がした。

気づかないふつをしておこですか（後書き）

読んで頂いて、ありがとうございます。パソコンが占領されてしまい、最後のへんは携帯で打ちまちま。友希はひじひじ。

侍女さんたちの視線が痛いです

どうしてこの鏡は繫がつてしまつたのだろう。繫がらなければ知らなかつたのに。しかし、繫がらなければよかつた、とは思えないほど、この状況に、ライの存在に、慣れきつてしまつた。

「このままじや、まずいなあ」

うーん、と天井に向かつて、伸びあがる。ふと、視線を感じて、鏡の方に振り返ると、ライの部屋を掃除に來たと思われる侍女さんたちに凝視されていた。彼女たちは、私に気づかれたとわかると、そそくさと、業務に戻つていく。今、何かおかしな行動をしていたのだろうか。伸びていただけだ。向こうの人々にとつては、奇妙な行動だつたのか。

最近、侍女さんたちの視線を浴びることが多くなつてきて、少し戸惑つてゐる。珍しい動物を觀察しているような眼差しに、正直あまりいい気分はしない。目が合つてしまつと、みな同様に掃除を開してしまつので、彼女たちに気づかれないように、こちらからもこつそり觀察してみたりもした。

大半が、奇妙なものを見る目だつたと思う。動物園のパンダの気持ちが少しだけわかつた。ただ、笑顔ではなく、だいたい、いぶかしげな表情だつたので、居心地の悪いことこの上なしだが。

印象に残つたのは、こちらを鋭い視線で睨みつけていた侍女さんだ。私の思い違いでなければ、その時が初対面だつたはずだ。恨みを買おうにも、接触したこともないし、むしろできないので、私なにがそんなに気に障つたのか全くわからなかつた。

「このまま見られ続けるんなら、バスタオル復活かなー」

その夜、日付が変わった頃、ライが部屋に帰ってきた。お酒のボトルとグラスを持って、鏡の前にやってくる。その、ほぼ習慣化している様を見て、少し心が浮き立つ。いや、浮き立つな私。それでも、ボトル」と持参とは珍しい。

「今日もお疲れ様。あのさ、最近、ライんとこの侍女さんたちに、やたらと観察されてる気がするんだけど。なんでなのかな知らない？ 私、まったく心当たりないのよね」

なにかあったのか、と聞くと、かわされるのは、もう何回も経験済みなので、あえて、自分の要件を伝えてみる。ライは、こちらをちらりと見て、視線をそらした。両手を細め、薄い唇に揶揄の笑みを乗せる。

「お前に観察する価値などあるのか。珍妙な動きはおもしろいが」

「なつーあんたねつーいつも思つけど、その口の悪さなんとかしさによつー！」

バンバンと、鏡を激しく叩く。そこに正座し、と言いたい。小一時間みつちり説教してやりたい。円滑な人間関係のための第一歩、笑顔もまったくくなつていない。いや、この男の場合は、笑顔はいらない。にこやかな笑顔など、恐すぎて想像できない。自分で自分の寿命を縮める結果になりかねない。

田の前で、にやつと笑つてゐるライに、はつと我に返る。面白がられている上に、絶対、誤魔化された。いつもしてやられてゐるが、

今日はとにかく追求してやる。『気遣いなど、ビビに捨ててやる。

「ライ。あんた、理由知ってるんでしょ。さつさと吐け！結構居心地悪いんだからね！」

ぐつと、目に圧を込めて、ライの黒い目と視線を合わす。ライの周りの空気が重くなる。漆黒の瞳に鋭さが宿り、一気に威圧感が増す。どうしても言いたくないのか、鋭利な気配を漂わせている。負けてなるものか。私が観察対象になっている理由を聞いているのだから、関係ないとは言わせない。じっと、目をそらさずに見つめ続ける。

「……お前は、人に言つ前に、自分を省みる」

はあつ、と知らず詰めていた息をはぐ。この勝負、多分勝つた。高圧的な雰囲気に屈しなかつた自分を褒めたたえたい。人外な美貌に睨まれるのは、本当に恐かった。慣れてきたとはいえ、あまり、味わいたくないものだ。

ライも、眉間にしわを寄せ、心底嫌そうな表情をして、大きく息をついた。

「そんなに知りたいのか」

「うん、知りたい」

当たり前だ。恨み混じりの視線もあるし、なぜ観察されているのか知りたいに決まっている。目線で促すと、ライがグラスの中身をあおった。少し間が空く。

「おそらく、お前が、侍女たちに観察されているのは、ユウキ……
お前が私の女だと思われているからだ」

侍女さんたちの視線が痛いです（後書き）

読みお疲れ様です。そして、ありがとうございます^_^
いサブタイトル。
繋がれな

面倒な「ひと」になりました

「はあ？」

目が点になつた。話が飛躍しそぎてついていけない。口をぽかんと、開けた私に、ライは、眉間にしわを増やし、歯を噛めた。黒曜石の瞳は手元のグラスを眺めている。

「一体、何がどうなつてそんなこと?」……

「知らん」

「はいー! 知つてゐるくせに嘘つかないー!」

即答で返してくるライにすばやくつひじみを入れる。それにしても、どうしてそんな誤解が生まれてしまったのか、本当に謎だ。

「……私が鏡の中に女を囲つてこるとこう噂が伝まつてこりじこ

「ええつー? なにそのいかがわしい噂ー? つか、そんなことできるの?」

ライは、心底、心外だといつぶつと、顔をしかめている。

「やうやく思えればできるが、私にそんな趣味はない」

やうやくと思えればできるのか。背筋が寒くなり、少し後ずさる。鏡の中に人を囲えるとは、どういった原理なんだ。ライの話から向こ

う側の人々が、魔力を持ち、魔法を発動できるというファンタジックな技能をもつてているのは、すでに知っている。侍女たちも、魔法で掃除などをしているようだ。だが、知っているのと、実感を伴って認識しているのとは、別物である。

魔力が、こちらの電気のような動力源にあたり、魔法が、機械みたいなものかな、と思っていたので、鏡の中の人を囮うことができるという発言には、衝撃を受けた。こちらでは、実現不可能なことが、あちらでは、実現できてしまうのだ。こいつらの時、ライは、やつぱり異世界の人なんだな、と実感する。

私が、異世界間ギャップにショックを受け、思案に沈んでいる前で、ライは、手のひらで目を覆い、疲れたようにため息をつくる。

「で、今日、ライがそんなにお疲れのも、もしかして、それ関連だつたりする？」

「違う」

やつぱりそうか、と、一人でうなづいていると、何かにあきらめがついたのか、ライが、額に手をあてながら、心持ち低い声で、ぼそぼそと話しか始めた。

「周りの奴らが、そろそろ妃の一人でも娶れとうるさくてな。私が、政務を終えたあと、おとなしく自室に帰るなどおかしい、から始まり、夜、自室に誰も入れたがらないのは誰かと密会しているからだ、となり、その上、度々、鏡の中にお前が現れるから、侍女たちが、お前を密会相手だと勘違いしたようで、面倒なことこの上ない。いつのこと、お前を妃としてはどうだ、という意見まであるな」

ライは、ちら、とこちらに田線をやり、大きく息をつくと、前髪をかきあげ、お酒をあおっている。私たちは、普通に異世界間交流をしていただけだ。密会などとこう怪しげな会を開いたことなどない。しかも妃つてなんだ。薄々感じてはいたが、やっぱり、ライは、王やら皇帝やらといつやつだつたか。さらに私を妃になど、無茶振りもいっしである。

それについても、侍女たちの視線の理由は、これだつたのか。あの侍女が、恨みを込めて睨んできていたのは、私がライの妃になるかもしれない女だと思ったからだ。きっとライのことが好きなのだろう。納得がいった。ありえないから安心し、と言いたい。私なんて、ライと同じ世界にいる彼女と、同じ土俵にあがることすらできない存在だ。

「ほんとこ、めんどくさいことになつてるわね」

つっこみどころがあつすぎで、びつ返せばよいのかわからなかつたので、率直な感想を述べる。

「本当にな」

実感のこもつたライの言葉の余韻を残して、一人の間に沈黙が落ちた。ひた、と鏡に手をのせ、その冷たい感触を味わう。こんなに近くに見えるのに、とてもなく遠い。

「……私たち、触れたこともないのにね」

「……本当にな」

鏡越しに視線を交わしあう。見慣れた漆黒の瞳を、じっと見つめ続けた。ライも静かな目でじらじらを見ている。

「……つふふ

ふいにおかしくなつてきて、笑ってしまった。笑わなければ、なんだか泣きそうだった。その声に、ライも夢から覚めたように目を見張つてから、足元に目線を移し、ゆるやかに口の端をあげる。

「まあ、侍女たちには、それとなく言つておこう

さきほどまでの空気をとりなすようなその言葉で、少しきなさを孕んだ今夜の、向こうの人々いわく密会が、はお開きになつた。

面白いな」とになりました（後書き）

いいまで読んで頂いてありがとうございますへへただいま、サブタイトルを考え直し中。行き当たりばつたり感満載でお届けします
^ ^ ;

ホラー苦手なのに惨劇に遭遇しました（前書き）

そんなに激しくないですが、残酷な表現があります。苦手な方はご注意ください。

ホラー苦手なのに惨劇に遭遇しました

ライがたしなめてくれたのか、あれ以来、あからさまな視線を感じることはなくなつた。いつも通り、ライと語らい、明日も早いからと、お互に早々に床についた。

ガシャアアアアア

「……っ！？」

夜中、けたたましい何かがなぎ倒されたような激しい物音に飛び起きた。びっくりしすぎて、ベッドの上で目を見開いたまま、つかのま硬直してしまつ。なんとか身体の緊張を解いて、状況を把握しようと、あたりを見渡す。薄暗い室内に恐怖が湧く。すばやく明かりをつけ、もう一度部屋を見渡す。と、また凄まじい音があたりに響いた。

鏡からだ。

向こうで何かが起つてゐる。身がすくんで動けない。自分で自分を抱きしめながら、じつと、鏡の向こうに目を凝らす。とても暗い。こちらが明るいのでよく見えない。ひるむ心に鞭を打つて、そろそろと、鏡の方へ向かつ。そつと両手をついて、おそるおそる鏡の向こうを覗きこむ。

視界の範囲には誰も見当たらぬ。だが、ふかふかの絨毯には、原型が何かわからない破片があちこちに散らばつてゐる。

「ライ……？」

姿が見えないが、どこにいるのだろう。あの、激しい物音の中、寝ているとは思えないが。ライを探すために少し、身体をずりす。

瞬間、凄い勢いで何かが視界を横切った。強烈な破壊音が響く。反射的に、びくつと身体が震え、ぎゅっと目をつぶる。一体なんだというのだ。視認できない早さで何かが吹っ飛んでいった。開くのを拒否している瞼をこじあける。

「う……！」

暗い赤の色彩が目に飛び込んできた。認識した途端、息がのど奥に詰まる。人の血と思われるものが、鏡に飛び散っている。おぞましさのあまり、その場にへなへなと座りこんでしまった。

「な、なんなのよ。どうなってるのよ」

情けない声が漏れる。人間、経験したことないことに唐突に、遭遇するどうにもできない。しかもこっちは、生まれてから平和に浸かりきった生活を送ってきていたのだ。目の前に飛び散った血痕に放心するしかなかつた。視線を向こう側にやつたまま、混乱から抜け出せないでいると、視界の端でなにかが蠢いた。

不自然なほど身体を跳ねさせながらも、そちらに視線を移す。薄暗闇の中で、床に両手をつき、這いつくばつた身体を、緩慢に持ち上げている男がいる。衣服は破れ、男自身も相当、傷を負っているようだ。うなだれているため顔は見えない。

すつと、気配を感じさせないたたずまいでのまにか、そのままに立つ男がいて、ぎょっとする。鏡越しでもわかる静かで冷徹な空気を纏つているその男は、ひどく傷つきながらも起きあがろうとしている男を無表情で冷然と見下ろしている。温度のないそのままに怖気立つた。

深手を負った男は、すぐ横の存在に気づいたのか、弾かれるように顔をあげた。その急激な動きにつられ、そちらを見やると、男と目が合う。瞬間、何を思ったのかこちらに向かって走ってきた。ぎょっと、身体が堅くなる。髪を振り乱し、すごい形相で迫ってくる男に、身体が動かず、逃げたいのに逃げられない。恐慌に陥る。

「あ、あ……」

喉から悲鳴が押しつぶされたような声が出る。目前に迫る男。目が血走つていてるのが確認できる。刹那、男の身体が、強烈な圧力でもって、鏡に叩きつけられた。

眼前の凄まじい惨状に、私の意識は臨界点を突破し、弛緩した身体はその場に崩れ落ちた。

ホラー苦手なのに参観に遭遇しました（後書き）

読んでいただきありがとうございました。昨日はダウンしました。寒いので、皆様も、体調にはお気をつけてくださいね。

遊びにもなりませんでした ライ *side* (前書き)

友希 *side* より、若干、残酷な表現があります。苦手な方は「」注意ください。

遊びにもなりませんでした ライ side

人が心地よく眠っていたら、一匹の賊が侵入してきた。私の護衛たちは何をしていたのか、甚だ疑問であるが、とりあえずは目の前の敵に意識を向ける。最近、執務ばかりで身体が鈍っている気がするから、少し遊んでやろう。知らず、口の端があがる。

頭上から、鋭い氷柱が降ってきた。立て続けにベッドのシーツへと突き刺さる。ふかふかと、足場が悪い中、降り注ぐ冷たい矢を、魔力を使わずに避けていく。これが火系統の魔法だったら、ベッドが燃えてしまうため、即座に打ち消していただろうが、とりあえず、寝ていた身体を起こす準備運動だ。

すべて避け終わると、ベッドが剣山のよくなっていた。軽くベッドのうえから飛び降り、相手をしてやろうと、賊のもとへと歩き出す。人を怪物でも見るような目で見ていた男は、私が近づいて行くのに気づき、なにやらぼそぼそと唱え出した。この男は馬鹿以外の何物でもない。敵を目の前に悠長に詠唱開始とは、片腹痛い。

先ほどの攻撃で男を見るまでもなく、水系統なのはわかっていたので、詠唱の内容に耳を澄ましてみる。氷の攻撃なら、再度、運動しようかと思ったが、大量の水が降つてきそうな気配がしたので路線変更だ。起きぬけに濡れ鼠は勘弁願いたい。

術式が完成するまえに、軽く地を蹴り、男の目の前に移動する。瞬間、男が驚く暇も与えず、左腕を振りあげ、なぎ払う。

ガシャアアアアア

丸い小さいテーブルを巻きこんで、男が壁まで吹っ飛ぶ。詰まつたような鈍い声が男からもれる。花瓶も派手に割れてしまった。起き腕を使わなかつた分、逆に力の加減を間違えてしまつたのだろうか。多少、防御くらいしてほしい。遊びにすらならないとは、小物もいいところである。つまらない。

一息吐いて、やつと立ちあがつた男の右横に移る。間髪入れず、左足で軽く蹴り飛ばす。直接、壁にぶち当たり、跳ね返つて床に転がつた。たつた一撃しか与えていないのだが、男は、なぜか血に塗れている。私を襲おうというのなら、もつと修行なり、なんなりしてこい。あと、一人で来るな。人の睡眠時間を削つておいてこのざまとは、冗談ではない。私の睡眠時間を返せ。

男が必死に立ち上がるつとしているのを無表情で眺める。相手の力量も見極めずに襲つてくるとは、愚かに過ぎる。そろそろ緩慢さに苛立つてきた。音もなく男の左側に立ち、すつと、片足を持ち上げる。

男の背中を踏み抜いてやるうとした瞬間、今までの鈍さは何だつたのか、という素早さで男が駆け出した。何か楽しいことでもしかしてくれると、視線をやると、男が走つてゆく先に、ユウキが見えた。あいつは、こんな時間に何をやつていてるんだ！激しい物音をたてて遊んでいた自分を棚にあげて悪態をつく。

凄まじい勢いでユウキに向かっていく男を見て、かつ、となつた。すぐさま、ユウキの前に防御壁を張り、純度の高い魔力を練つて、男の背中目がけて叩きつける。防御壁と魔力の板挟みになつた男の身体は、激しい衝撃と圧力に耐えきれず、見苦しく押しつぶれた。防御壁には血がべつたりとついている。

「大丈夫か！ユウキ」

崩れ落ちた男に目もくれず、ユウキのもとへ向かう。防御壁を解き、鏡に手をついて覗きこむと、氣を失つて、倒れこんだ彼女が目に入った。攻撃がユウキにも当たつてしまつたのだろうか、と一瞬焦るが、防御壁は完璧だった。それに、この鏡がある限り、あり得ない。鏡に置いた手を見て、その事実に気づかされる。

この鏡は音以外通さない。頭に血がのぼった瞬間、そのことが、すっかり頭から抜けていた。鏡越しに青白い顔色のユウキを見つめながら、口元には苦笑が浮かぶ。

田の前で、女子供には、かなりきついものを見せてしまつた。本当は触つて確かめたいが、見る限りでは外傷はなさそうだ。目覚めるまで側にいよひと想い、ゆるゆるとその場に座り込んだ。

「あまり、私を恐れてくれるな」

せつかくおもしろそうな遊び相手が見つかったのだ。ユウキには、ユウキのままで居てもらわなければ、張り合ひがない。生き生きとした反応が返つてこなければ、意味がないのだ。

それにして、この部屋の惨状はいただけない。この男の魔力は、まずそうだし、侍女たちに処理を任せよう。ユウキが目覚めたときに、恐れを抱かせるようなものは、なるべく排除しておく必要がある。侍女を呼び、掃除を頼む。

うしろで働く侍女たちの気配を感じながら、こつ、と頭を鏡にもたせかける。意識のない彼女は、おもしろくない。静かに横たわる

コウキの伏せたまぶたを眺める。じろじろとよく変わる表情や、いつもの咬みついてくる様子を思い浮かべた。われ知らず、口の端がゆっくりとひきあげられる。

「早く、田を覚ませ、コウキ。私を失望をせてくれるなよ」

遊びにもなりませんでした　ライside（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。ライは興味ないと冷酷なようです。男がやられるといふ、あんまりなまなましくは、してないつもりですが、大丈夫ですよね……？自分ではわからない。

飛んで火に入る私です（前書き）

ちょっとだけ、残酷な表現がありますので、お気をつけください。
ライ sideのがいけた人は大丈夫だと思います^ ^

飛んで火に入る私です

凄まじく恐ろしいなにかを見たような気がする。今まで生きてきた中でも一番におぞましいものを眼前につきつけられた。

暗く沈んだ意識の内側をふわふわと漂つていて。意識が勝手に行程の映像をなぞつてゆく。自動再生されるフィルムに私は抗うすべもない。少し離れた場所から無理矢理、見せられていふうだ。

床に倒れ、必死に立ち上がるつとする傷ついた男のすぐ側に温度を纏わない男が立つ。凍てつく視線を、はいつくばる男に注いでいる。

「……っ！－！」

背筋がひやりと凍りついた。冷たい汗が滑り落ちていく。

ライだ。

存在そのものを否定するような侮蔑を含む表情をしている。さつきは気がつかなかつたが、ライに意識が集中していたせいか、傷つき、血にまみれた男を背中から思い切り踏み抜こうとするといふがはつきりと目に焼き付いた。

いつもからかい混じりで私と対しているライの中にあるひどく残忍な一面を見せつけられ、呼吸が浅くなる。吸い込んで、吸い込んで、空気が肺まで行き渡らない心地がした。

溺れるよつに喘ぐ私の目の前で映像は再生され続けている。髪を振り乱し、気が触れたよつに走つてくる男の後ろに焦点は合わなかつたままだ。

男につられてこちらを向いたライは、田を見開き、幾分かその身に温度を取り戻したよつに見えた。瞬間、眼光に淒味を帯びて、目に見えないなにかを、男に向かつて打ち出したようだつた。

意識を現実から引き離した空恐ろしくも惨たらしい場面がくる。いやだ。あんなもの、一度で十分だ。田を閉じたい気持ちでいっぽいなのに閉じられない。さつきまで、ゆらゆらと漂つっていたと思つたのに、逃げたいと思つた時に全く動けないとは、どうなつているのだ。何かに縛られたように身動きがとれない中で、必死にもがく。こわい、こわい、こわい。

「……キ」

何かが鼓膜をかすつた。そのかすかな音が、聞き慣れた低音だと認識した瞬間、意識の海から、急速に引き上げられる感覚に襲われた。

「……つはーーつ」

鋭く息を吸つて、弾かれたよつに田を開く。柔らかいラグの感触が頬から伝わる。心臓が物凄い勢いで動いていた。現実世界に戻つてこられたようだ。べつたりと背中に汗をかいしている。溺れかけたような荒い息を整えようと、深く息を吐いた。ゆっくりと身体を起こすと、田の前に心配そうな顔でこちらを見ているライがいた。

「コウキ」

鏡に両手をついて、眉を寄せながら、じちらを覗きここんでくる。いつものライだ。表情にきちんと感情が乗っているのがわかる。ほつとする反面、心の内には、残虐な行為を平然とやってのける彼の姿も焼きついている。

いま、私の心配をしていいるライと、冷たく凍てついた気配を纏つたライ。

きっと彼は、意図して、その一面を見せなかつたのだ。私が聞いても何も答えない時は、そういうた側面が絡んでいたのかも知れない。私はとても平和な世界に生きていて、殺伐としたものとは無縁だとライには一目でわかつただろう。私に、ライの世界の残酷な面を隠して見せなかつたのは、優しさ、と言えるものだつたのかもしれない。

しかし、ライの中で、私は対等な存在ではない。そのことが、とても悲しい気持ちにさせた。ライに手加減されている。その事実に、思つより深く傷ついている。もちろん、あの思い出したくもない惨状を作り出したライを、何の葛藤も恐れもなく受けとめることはできない。震えそうになる身体を、両腕で抱きしめる。できないが、それをライにはじめから見積もられていたことに、私が、その彼にとつては日常である残酷性に耐えられないと、ライに思われていたことに、ひどく胸が詰まり、気持ちが沈む。

「ゴウキー。」

悔しさと悲しさで、自分自身を抱きしめながら、つづみしていく。私に、ライが、どうかしたのか、という風に私の名を呼ぶ。私を気にかけるライも、冷酷に敵を排除するライも、彼自身だ。そう呟み

しめるように心に刻んで、なにかに負けそうになるのを振り払うようになり、ライの漆黒の目と視線を合わせた。しつかりと、黒曜石の瞳を見つめると、彼は、その薄い唇をゆるゆるとひきあげた。その嬉しさと、酷薄さとを含んだ笑みに目を奪われながらも、私は、踏み込んではいけない領域に今、確実に一步踏み出した自分がいることをひしひしと感じていた。

飛んで火に入る私です（後書き）

13話目読み「ありがとうございます」でどうか悩んでいたら、間が空いてしまいました。すみません。タグにほのぼの入れての間違ってる気がしてきました。ほのぼのしないよー。

心のこもったうなつたのでしょうか

搦め捕られそうな感覚から、ふと、鏡に置かれたライの手のひらに視線を移す。長く節高い指にいくらか力が込められているのか、先が少し赤い。あの指には本当に血が通っていて、ぬくもりがあるのだろうか。触つて確かめてみたい。温かいのか、冷たいのか、なんでもいいから、ライの体温を感じてみたい。

目線を上げると、ライが眉をひそめ、じちらをじっと見つめていて、早く鏡に手をつけ、とでも言いたげにしている。指先にまた少し力が加わったのか、赤みが増している。あの赤と同じところに触つたら、なにか感じられないだろうか。もし、ライの温度をこの手で感じることができたら、胸に巣くう恐怖や、困惑、悲しみ、憤りなどドロドロとしたものが入り混じった複雑な感情が、少し落ち着くよひな気がする。

食い入るように見つめてくる漆黒の瞳に、吸い込まれそうな錯覚を覚え、その引力に導かれるままに、そろそろと、赤味を帯びた指先に手を伸ばす。鏡の上から、ライの指先に、ひとり、と自分の指先を合わせる。

瞬間、ぐつと、指先に圧がかかった。いつもの冷たい鏡の感触ではない。

「えつ？」

思わず声が出た。目の前に、目を見開いて、合わさつていてる指先を凝視しているライがいる。反射的に指先を離そうとしたが、ライ

の方が一瞬早かつた。向こう側から、ぬつと手が伸びてきて、引こうとしていた私の手首を、きつく握り、ぐつと、勢いよく引っ張られた。

「うわっ！？」

眼前にせまる鏡面に突っ込む衝撃に備えて、ぎゅっと目をつぶる。予想していた激痛は訪れず、直後、大きな何かに包み込まれる感触がした。さわやかな柑橘系の香りが鼻腔をくすぐり、かたく緊張した身体を少し緩める。

「ユウキ、大丈夫か」

「」く至近距離から聞こえる低音に、はつと我に返り、目を見開く。ライに手首を掴まれたまま、腰をしつかり抱きよせられている。頬にはライのかたい胸板の感触。生々しい体温が伝わってくる。

「うええええっ！？な、なんであんた！え？え！？」

「とまあえず落ち着け、ユウキ」

私の手首を離し、その手で頭を抱え込んで撫でてくれる。いやいや、落ち着けるか。しかも、なんだ、この体勢は。

「や、は、離して、ライ！落ち着いたから。もう、落ち着いたから……」

ぐいぐいとライの胸を押し返す。よりによつてこの男なぜガウン着用なのか。確かに体温感じたいって言いましたけど、ここまで求めてません。

がつちり腰をホールドされているのか、力いっぱい抵抗しているのに、全く動かない。上から微かに笑う気配がして、睨んでやりたいのに、後頭部も手で押さえられていて、口でしか応戦できない。

「はーなーせーつーー！」

叫んだ瞬間、ぱつと、後頭部を抱えていた手が離され、ライは楽しそうに黒々とした目を輝かせながら、両手で私の腰を抱えなおした。ライと、ぐっと密着することになり、顔に血がのぼる。遊ばれているのは、わかっているのだが、いかんせん、この超絶美形な顔との距離が近すぎる。

「なんで、あんたはそんなに落ち着いてんのよ

「お前には落ち着いてるみたい見えるのか。こんなに気分が高揚するのは久しぶりだ」

整った顔に綺麗な笑みを乗せ、囁いてくる。確かにとても機嫌が良さそうではある。しかし、私の心臓が限界を訴えてきているので早く離してほしい。こんなに早い心音は今まで聞いたことがない。

思い切りもがいて訴え続けたが、ライが満足するまで離してもらえず、結局私の体力だけが無駄に削られた。肩で息をする様子をまた興味深げに目を細めて観察してくるのだから、たちが悪い。

呼吸が整い、落ち着いて周りを見渡すと、紛れも無く、いつも覗いていた鏡の向こう側の世界が広がっていた。ふかふかの絨毯に、豪奢な飾り棚があつて、到底一人用とは思えないくらいの大きさのベッドが置かれている。後ろを振り向くと意匠を凝らした大きな鏡

の回りに自分の部屋が見えた。どうやら、本格isticの世界に来てしまったようだ。

「…… 一体どうなっているのよ」

「おひこりうなづいたのやこゆ」(後書き)

「おひこりうなづいたのやこゆ」(後書き)

本当に繫がってしまったよひたす

「うあえず、落ち着いて考えてみよつ。ライと私の指先が同じところに触れた瞬間に、空間が繫がつた気がする。私は多分、いや確実に、この鏡を通つて来たのだと思う。何の抵抗もなく、すんなりとこちらの世界に来ることができた。だとすれば、鏡を媒介に、あちらとこちらの世界が繫がつた、と考えていいのだろうか。少し嫌な考えが浮かんだが、見なかつたふりをして、心の奥底に沈める。

「ねえ、この鏡通つて来たのよね、私。つてことは、ライと私の部屋が行き来できるよくなつたつてことなのかな……？」

少しでもましな可能性にかけて、問いを発してみる。

「その鏡が繫がつてれば、そうなるな。だが、お気楽なお前には、帰れないかもしけんとこつ選択肢はないのか」

ライはにやにやとひとの悪い笑みを浮かべて見下ろしていく。人がせつかく見ないふりをした可能性を掘り返さないでほしい。

「もとはとこえば、ライが引っ張るからでしょ！ほんとに帰れなかつたらどうすんのよー恐いこと言わないでよね

不安な心を隠すよひこ、ライを睨みつけ、悪態をつく。鏡に触れて、確かめるのが恐くなつてしまつた。しかし、確かめなければ、帰れない。あんなに簡単に来れたのだから、帰りもすんなり返してください。お願いします。鏡に向かつて、目を閉じて両手を合わせる。

「私はそれでも一向にかまわないが。コウキーへぐらい余裕で養つてやれるぞ」

ライは後ろで、腕を組み、私が鏡に祈つているのを物珍しげに眺めながら、とんでもないことを言つていて。そんなことになつてたまるか。向こうに私の部屋が見えているのだから、絶対に帰れるはずだ。よしひ、と気合を入れて鏡の方に踏み出す。

「いひー。」

踏み出した、はずだつた。後ろから、ほびよく筋肉のついた腕が巻きついている。長い指に、首からあごのラインにかけて撫で上げられ、ぐつと顔を左に向けられた。すぐ横にライの整つた顔があり、漆黒の目を細めながら、薄く笑うさまが見てとれた。解放されたばかりの心臓が、ひと際大きく鳴る。密着しすぎて、心音が聞こえるのではないか、と焦る。

「せつかくお前に触れられるよひになつたといつのこと、私が簡単に帰すと思つのか」

色氣のある低音が耳元で響く。びくつと身体がはね、顔に血が集まるのが自分でもわかる。さつさも遊ばれたおしたところだというのに、素直に反応してしまつ自分がうらめしい。いつも、と低くうめきながら、ライの釀し出す雰囲気に負けないようじと、鋭く睨み返す。

「もつひー散々、遊んだじょー！冗談やめてよね。私は絶対部屋に帰るんだからー。」

腰に回された手を外そと、前に体重をかけて、もがく。ぱっと

案外あつさり離され、もがいていた勢いそのままに、鏡に突っ込んでしまう。驚き、咄嗟に両手をつこうとすると、鏡面をすつと、通り抜けた。

「わあっ！？」

まぬけな声をあげながら、自室の床にダイブしつつある私の腹にまたもや、背後から手が回された。がしつと受け止められ、状況を把握しようと、見回すと、私の部屋に私の上半身と受け止めたライの右手、ライの部屋に、私の下半身とライの大部分が存在している。鏡に当たる部分には何の抵抗も感じないのだが、身体が半分で分断されたような、微妙に複雑な気分である。

「……とつあえず、引き上げてくれると助かるんだけど」

若干、詰まつたような声で訴えると、ライは、喉の奥で笑いながら、右手に力をこめ、体勢を整えてくれた。それにしても、女といえども、人一人の体重を片手で軽々と支えられるとは、相当鍛えられているに違いない。

「大丈夫か。ほんとに危なつかしいやつだな、お前は。まあ、そのおかげで、私とお前の部屋が、繋がっていて、お互に行き来できそうなことは確認できたが」

ライは、腕を組み、鏡を眺めている。あんたが急に手を離すからだ、と言い返しそうになる口をつぐみ、私は自分の部屋に帰れることに心の底から安堵した。いきなりこの世界に連れ込まれ、向こうに自分の世界が見えているにも関わらず、帰ることができなかつたら、鏡に取り縋つて泣き叫んでいたところだ。そんな醜態をさらすことにならずにすんで本当によかつた。大きく息をつく。

「てか、ライも行き来できるって、迷惑以外のなにものでもないよ
ね」

「失礼なやつだな。私の何が不満なんだ」

心の声が漏れていたのか、目の前で、ライが眉をひそめている。今までには、接触できないため、人畜無害だつたが、実体を持つこの男は危険要素が満載である。なんだか、段々面倒な事態に引きずりこまれている気がする。一度、落ち着いて、この状況について考えたい。

「私、部屋に帰るけど、絶対入つて来ないでよね」

不服そうな表情のライに、あまり意味のない釘を刺してから、私は、あちこちとこちこちを繋ぐ境界線をまたいだ。

本当に繋がりこなす（後編）

読~あらがといひ~やむこます~へへ 龜更新ですみませんが、まつたりお
せき合こへだれると、とても喜びます。作者が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3079y/>

こちらとあちらとそれに関する諸々の話

2011年11月30日12時51分発行